ほっかりいっぱいみさきっ子

御前崎市立御前崎小学校　学校だより　令和３年度　６月号

←9 月受入れ式のカメ

↓放流時のカメ

カメの飼育が育んでくれる　みさきっ子の優しさ

19 頭もの、大きくなりすぎてしまったカメたち。元気に育った個体数も個体の大きさも想定外。前号でもお伝えしたとおり、配当されたエサ代も底を尽き、水槽もどんどん狭くなりました。

海水温の条件を満たしたこともあり、例年より一か月早め、６月９日（水）に放流を行いました。

放流の当日、カメを一頭ずつタライに移し、トラックの荷台に乗せていると、遊んでいた１年生が集まってきました。「今から放流するから、もう見られるのは最後だよ。」というと、１年生は遊びを切り上げ、大急ぎでカメ小屋に向かいました。そして、カメに向かって口々に何やら話しかけていました（笑）。その後、トラックが出発すると、１年生から自然に「じゃあねえ～。」「がんばってね。」「元気でね。」「さようなら。」などの声がかかりました。１年生とカメたちに日常的なかかわりはありません。でも、高学年のカメへの思いが引き継がれていることをほほえましく感じたできごとです。

どんなに大きくたって、子ガメたちは砂も海も初めて

今年のカメは甲長も体重も、過去最大級です。「今年のカメは大きくてたくましいから、後ろを振り返りもせずに行っちゃうんだろうね。」「感動のシーンは見られないかな」職員室ではそんな会話がありました。けれど実際の放流会では、やっぱり感動シーンがたくさんでした。

どんなに大きくたって、カメたちは、砂浜も波も大海原も初めて出会うのです。波と反対方向に歩いていく子、固まって動かない子、重すぎて波にさらってもらえない子などの姿に、子どもたちからは自然に「がんばれ」「いまだ、行け」などの応援が始まりました。波間からカメの前足が見えたときは、「あ、わたしたちに手をふってるよ。」と４年生がうれしそうに話していました。最後の１頭は、なかなか海に行くことができませんでしたが、何度かの挑戦のあと、ようやく波に運ばれ沖へ向かいました。

その海を見つめる子どもたちの温かいまなざしが、放流会の成功を物語っていました。このカメたちが、自分の力でたくましく生き抜いて、御前崎の海に帰ってきてくれることを祈ります。

５・６年生の保護者さま、こどもたちを休日のカメ当番に送り出してくださったこと、そして、カギ当番へのご協力、本当にありがとうございました。

カメはもちろん、ポンプやろ過機のピンチに何度も出動してくださったホワイトハウスの秋野さま、カメ飼育のご指導をいただいたカメ博士の小林さま、ありがとうございました。

海水をくださった漁協さま、ライフジャケットを準備してくださった教育委員会さま、保護監視委員のみなさま、すべての方のご尽力に心より感謝申し上げます。

（秋に迎える子ガメのエサ代はどうしようか、悩ましい校長　仁平美和子）